

はしがき

いまを生きる

日本の文学史を紡ぐ際、通常は中国大陸から漢字が伝来したのち、文字文化が成熟した奈良時代^{じょうだい}の上代文学から始めることになる。本書もそれにならない、アメリカ文学の歴史をヨーロッパ人が入植して文字で記録を残し始めた17世紀頃から語ることになるが、各国の文学史を扱う書物としては比較的新しい時代から始まる部類に属するだろう。アメリカには、規範とすべき古典古代の文学がないのだ。小説というジャンルの起源には諸説あるが、たとえばそれを物語性があり、人間関係を描きつつ、登場人物の性格や心理を浮かび上がらせるもの、と捉えるならば、近代市民階級が勃興して読者層が拡大した18世紀半ばのイギリスに始まる。アメリカ革命の季節が訪れる直前のことである。したがって、アメリカ文学がもつ特徴の1つに、始まりから近代文学として立ち現れたという点が挙げられる。そこにあるのは、いまを生きる私たちの文学なのだ。

18世紀後半にイギリスから独立したアメリカは、南北アメリカ大陸内の基盤を固めたのち、19世紀後半頃から太平洋や東南アジアに進出する。そうして第2次世界大戦後の新秩序構築を契機として、世界に君臨する超大国の座に登りつめた。敗戦国である戦後日本は、憲法や法律といった国家的次元から、映画、音楽、ファッションなどの大衆文化に至るまで、良かれ悪しかれアメリカの影響を大きく受けて今日に至る。アメリカ文学は敗残者を描くことが多いといわれるが、だからこそ、それはアメリカナイズされた敗戦国家に生きる人々の苦しみを映し出す鏡にもなった。アメリカの物語は、日本の物語でもあるのだ。戦後日本の様々な文学者が、長い歴史を有する他国の文学において、アメリカ文学の翻訳や批評に取り組んできた理由の1つに、この内なる〈アメリカ〉というねじれた感覚があるのだろう。

アメリカ文学史の現在

歴史が浅いということは積み重ねられた過去や伝統に縛られないということでもあり、自らのアイデンティティを過去ではなく未来に求める傾向を生み出

す。先例にとらわれないアメリカの国民性は、文学においても様々に実験的な作風を生み出した。この革新的精神は、差別撤廃と自由や権利を求める公民権運動が勢いを増した1960年代に、一元的な原理や歴史観に異議を申し立てるポストモダニズムと呼ばれる思考方法を創出し、それが80年代にかけて浸透することで文学史観も変容させた。その結果、文学史から学ぶべき内容が、理想的にはきわめて多岐にわたることになった。他方で社会が提供する娯楽が多様化し、各種の情報通信技術が発達した結果、文学離れ、活字離れが加速した。

かくして内容の多様化と文学離れという両立困難な現実を前にして、アメリカ文学史をめぐる書物も二極化の方向に向かうことになる。すなわち学際性を前面に押し出し、あるいは事典的な構成をとり、テーマ論的解説に重点を置くものが増える一方で、視覚資料などを援用して「文学」の概念を拡大解釈する傾向も生まれたということである。だが、いずれの方向にせよ、本来最も重要であるべき文学作品をめぐる視点が後退しつつある感は否めない。くわえて便利なデジタル時代が到来した結果、読者は逆に過剰な情報の洪水に溺れ、全体像が見えづらくなっている。私たちは、そうした複雑な時代にいる。

日本語読者のための、世界の中のアメリカ文学史

こうした現状を踏まえ、本書はあらためて文学史の原点に立ち戻り、狭義の文学を文学作品として読む姿勢を基軸としている。新しい文学観、歴史観がもたらした知見を踏まえながらも、長きにわたって読まれることが可能である、日本語読者を対象とした、コンパクトながらも本格的な、読み物としてのアメリカ文学史である。情報過多を避け、文学史のエッセンスを読者に伝えることを目的としており、大学レベルでの教科書として使用されることも想定している。

本書のもう1つの特徴として、世界（文学）の中のアメリカ（文学）という視点、日本とアメリカの文学的関連、および21世紀の移民文学や翻訳文学など現代文学をめぐる記述を積極的に導入している点がある。本書を経由することで、アメリカの「古典」や現代文学の翻訳を読んでいる読者が、さらに幅広くアメリカ文学や世界文学、日本文学に関心を広げることができ、かつ他の外国文学や日本文学に親しむ読者がアメリカ文学への理解を深めることができる書物を目指した。

本書は全体の要約であるダイジェストに加えて、3部構成の形式を採っている。第Ⅰ部の各章では、冒頭にアウトラインを置き、歴史的背景や芸術一般も含めてそれぞれの時代を概説した後、重要な文学者やトピックをめぐる各論が続く。各章は、1820年（ロマン主義時代の到来）、1865年（南北戦争終結）、1914年（第1次世界大戦勃発）、1945年（第2次世界大戦終結）、1963年（ケネディ大統領暗殺事件）、2001年（新世紀）を、とりあえず時代区分にしている。だが、あらゆる歴史と同様に、時代の流れを厳密に区切ることは本来的に不可能であり、各章の内容が硬直的にこの区分けに則しているわけではない。また、それぞれの章のアウトラインは、歴史や宗教、社会をめぐる記述を多くしたり、文学その他の芸術表現に多くの頁を割いていたり等様々であり、形式的な統一は図っていない。同様のことは、その後続く各論で扱われる文学ジャンルについてもいえる。これらはそれぞれの時代の特性に応じて執筆したためであり、全体として、アメリカ文学のダイナミックな変遷が、読者に伝わることを最優先にした結果である。

第Ⅱ部では紙幅の関係上、全部で30点の代表的作品を取り上げ、具体的な引用箇所と関連づけながら、各作品の特徴と魅力を解説している。だがもちろん、アメリカ文学の代表作は他にもたくさんある。第Ⅲ部は資料編であり、さらに理解を深めるための文献リストと、世界（文学）史も含めた年表、および文学作品の関連地図を置いている。本書を通じて読者の皆さんを新しい文学体験に誘うことができれば、編者にとってこれに勝る喜びはない。

執筆のみならず、編集作業の過程でも様々にご協力いただいた執筆者の皆様に、この場を借りて篤くお礼申し上げます。また、脱稿するまでずいぶん時間を要しましたが、長きにわたり暖かく見守ってくださった法律文化社編集部の田引勝二氏に、心よりお礼申し上げます。

橋本安央
藤井光
坂根隆広